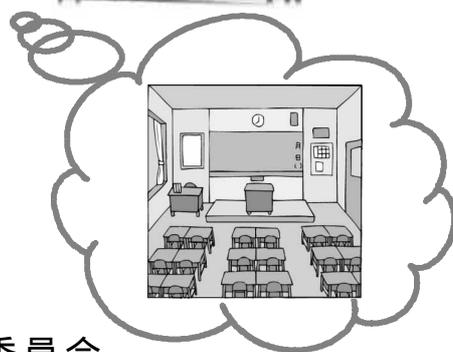


気がかりな子どもの 理解と支援マニュアル



練馬区教育委員会
練馬区学習障害児等教育推進委員会



この冊子をご覧の先生方に...
通常の学級に在籍する配慮を要する子ども(特に発達障害)の特徴的なつまずきの
理解と支援、保護者対応についてまとめました。ご活用ください。

目次



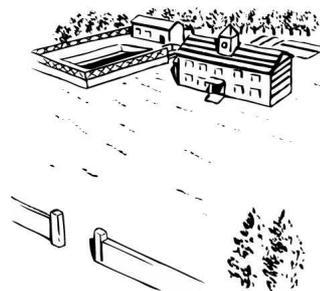
(1)つまずきの理解と支援

身体全体や手先の運動能力に課題のある子	...	2
書字が上手にできない子	...	3
読字・読語が上手にできない子	...	4
自分の気持ちや意見をうまく表現できない子	...	5
時間にこだわる子や切り替えのできない子	...	6
勝敗や順位を気にしすぎる子	...	7
特定のものや事柄に強くこだわる子	...	8
感情のコントロールがきかずに大騒ぎになる子	...	9
自分勝手な行動が多い子	...	10
テストを拒否する子	...	11
挙手をしたとき、指名されないと我慢できない子	...	12
ぼんやりしていて、やる気が感じられない子	...	13
教室から勝手に出て行ってしまう子	...	14
座っていられずに、立ち歩く子	...	15
苦手なことに取り組めない子	...	16
すぐに暴言をはいたり暴力をふるったりする子	...	17
ことばの指示が入らない子	...	18
一方的にしゃべる子	...	19
整理整頓ができない子	...	20
行動への取りかかりが遅い子	...	21

(2)気がかりな子どもの保護者と理解し合うために ... 22

(3)学級の保護者への理解を深めるために ... 24

(4)相談機関を勧めるために ... 26



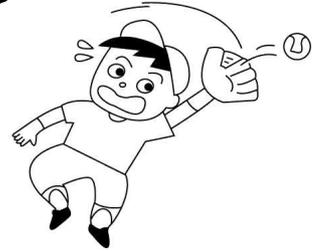
(1)つまずきの理解と支援



身体全体や手先の運動能力に課題のある子

こんなことが考えられます

運動や手先の器用さについては、だれしも得意、不得意があります。また運動経験が不足している子もいます。しかし、子どもの中には、運動能力（運動機能）の「未熟さ」により、手先の不器用さや身体の動きのぎこちなさが見られる場合があります。



支援のヒント

自尊心に配慮しながら、その子に合った運動量や運動の方法を用意します

例：体育の時間では、全員の個人目標を設定し、自己評価ができるワークシートなどを用意します。その際、その子の運動能力に合った目標と練習方法を、教師と本人がよく話し合って決定します。

運動や作業の流れをスモールステップに分け細かな手順を丁寧に示します

例：工作などでは、普段提示している手順よりも、さらに動きや難度を考えて細分化します。手順はメモなどにして忘れないようにしておきます。そして、ゆっくりとでも確実に仕上げられるよう援助します。できた時点でしっかりとほめます。難しいところは、その手順をくり返し練習します。

手先の不器用さに応じた配慮をします

例：「この子の手先の感覚は軍手を2、3枚、はめているようなものらしい」と分かれば、自然と無理な要求は減り、接し方も変わってきます。

配布物がうまく折れずに結局ぐちゃぐちゃになってしまう子ならば、配布物をそのまま入れられることができ、落とすことのないクリアファイル等を用意します。



担任の先生へ

生活や集団行動に支障がある場合は、保護者の理解を得て、個別に支援する機関を紹介します。

書字が上手にできない子



こんなことが考えられます

このような子どもは、「練習が足りない」「全体の能力が遅れているのでは」と評価され、練習を強要されがちです。書字は、「文字の視覚認知 理解 記憶 運筆」と、複数の能力が必要な活動です。その能力のいずれかがうまく働かない場合が考えられます。



支援のヒント

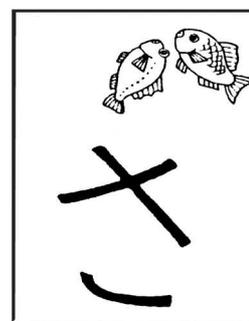
書字に取り組みやすい環境を整えます

正しい運筆や正しい鉛筆の持ち方を覚えるための補助具を用意します。

本人の筆圧に合った硬度の鉛筆を用意します。

ノートやワークシートのマス目は、本人が書きやすい大きさにします。

点結びや曲線等、運筆の基本的な練習をします。



カルタとシンプルなひらがなの例

ひらがな（カタカナ）の指導を工夫します

カルタ等を使って、具体物（例えば魚の絵）と“さ”という字を組み合わせることで、文字が想起しやすくなります。

最初は、“はね”や“はらい”等、正確な字を書くことにこだわらず、シンプルな字を指導します。

書字や想起に時間がかかったり、書くことへの負担が大きい場合は、ひらがな（カタカナ）表などを下敷きに使用します。

漢字の指導を工夫します。

漢字を一度、部首やつくりごとに、ばらして練習します。

「今日は“にんべん”のついた字を練習しよう」と、“へん”ごとに集めて練習することにより、想起が容易になります。

「“女”は“くのいち”」等、漢字の構成に着目して説明します。

腕全体を使って空書するなど、身体のイメージを併用します。

“はね”や“はらい”にこだわらず、書けたら認めます。

読字・読語が上手にできない子

こんなことが考えられます



視知覚と言われる「形を細かく見分ける機能」がうまく働かないと、似た字の区別が難しくなります。また、眼球の動き（眼球運動能力）がスムーズに働かないと行の読み飛ばしや文末の読み違えが多くなります。聞いて覚えること（聴覚記憶）に課題があると、ことば自体を覚えることが難しくなります。

これらのことから「一目読み」ができず、たどたどしい読み方になります。



支援のヒント

読みやすい環境を整え、読字への抵抗感を減らします

語と語、文節と文節を分けるなど“分かち書き”にします。

行間を空けた文を用意します。

字の大きさは、本人にとって読みとれる大きさにします。

一度に読む量、提示する量を少なくします。

行を読み違えてしまう場合には、読む場所に視点が定めやすいような工夫をします。

指でなぞる 読む場所以外を下敷きで隠す

右図のような紙を利用する

紙

一
行
分
空
け
る

似たような形の字の違いに気付くよう工夫します

“ぬ”と“め”のような似た字を教えるときは、「“め”と違って“ぬ”はここが丸まっているね」と説明しながら指で示します。子どもが気をつける視点がはっきりし、注目すべき違いを見つけやすくなります。

話しことばと実際の書字が一致できる支援をします

子どもが話したことばを聞き取って、カード化して示します。また、子どもが「一目読み」ができる長さの文にして、くり返し練習します。

漢字を含む文の読解を求めるときは、漢字にふりがなをつけます

読解の学習では、既習の漢字でも積極的に“ふりがな”をつけて、安心して読み取りができるように配慮します。

自分の気持ちや意見をうまく表現できない子

こんなことが考えられます



自分の気持ちを明確にできなかったり、状況判断が悪いため
に引っ込み思案になったりする子や使うことばの数が少なく
話すことに消極的になったりする子がいます。また、相手の話す内容を正しく理
解しようとしなかったり、ことばの裏の意味やあいまいさを理解することができ
なかったりする子もいます。



支援のヒント

**自信をなくして声を出さない子には、無理に話をさせようとしたり、叱
ったりせず、自分の気持ちを引き出します**

子どもが話し始めるまで待ちます。話し始めたら、それを復唱して話
をつなげていくようにします。

その子の気持ちを表すことばをいくつか提示し、その中から自分の気
持ちに合うことばを選択させ、実際にことばにする練習をします。

理解しにくいことばの意味は、子どもの身近な出来事を例にして伝えます

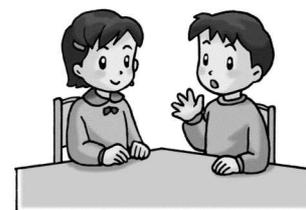
ことばの意味は、身近な出来事に例えたり、絵や図にして説明します。

「Aさんは、こういう気持ちでこんなことを伝えたかったんだよ」

「誤解しないで」など、友達との関係調整を図り、

いじめやからかいから守るとともに、教師が本人
の心の代弁者になるように心がけます。

「聞く・話す」の役割を交代する学習により、自分
の思いや願いを相手に伝える場を設定します。



「頼む・誘う・謝る・質問する・断る」などの場面を設定し、場や状
況に応じたことばや態度を具体的に表す機会をつくります。

頑張っている姿を周りの子どもたちに説明し、理解を促します

状況に関係なく話し始めた場合には、周囲の子どもたちがそれ
を聞いて笑ったり、過剰な反応をしたりしないように学級の
子どもたちに話しておくことも大切です。

時間にこだわる子や切り替えのできない子

こんなことが考えられます

下校時刻が過ぎると不機嫌になったり、運動会の練習などで時間割が変わると不安定になったりする子がいます。先を見通したり予測を立てたりするのが苦手な子の多くは、よりどころとしていた予定が変わると不安になり、混乱します。とっさの判断力が弱いことや状況の変化を受け入れられないことが原因として考えられます。また、気持ちの切り替えもうまくできないようです。



支援のヒント

新しい環境や日常と異なる活動について事前に分かっている場合は、変更する内容を話したり板書で伝えたりします。子どもによっては「いつ、何のために、どんなことをするのか、どんな行動をとればよいのか」など、その子が納得できるまで具体的な説明をする必要があります。

学級での生活の細かな予定を前もって知らせておくことや、毎日の予定をスケジュール表に書き出し、黒板に常時示しておきます。

活動の切り替えのできない子

「何時何分になったら」、「チャイムが鳴ったら」、「5回したら」と活動の終了の目安を示します。目安は紙に書くことにより、活動中も確認できます。目安までやり遂げたら、すぐに評価します。



新しい事柄・状況や予定の変更を受け入れにくい子

変更の理由や現在どうすべきかを...

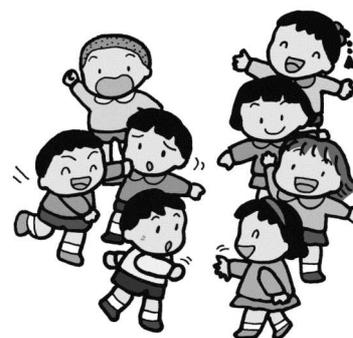
具体的で簡単なことばや視覚的な絵図等により、説明します。

望ましい行動を具体的に示します。

子どもと一緒に望ましい行動をします。

勝敗や順位を気にしすぎる子

こんなことが考えられます



短距離走の途中で一番になれないことがわかると走るのを止める子や、自分のチームが負けるとかんしゃくを起こし仲間を責めたりする子がいます。また、平気で列の途中から割り込む子や先頭に並べないことに怒り出す子もいます。

勝敗や一番にこだわる原因としては、自分にとって分かりやすく、安心できる情報に頼る傾向が強いことが考えられます。

また、「勝ちはいいこと、負けは悪いこと」という価値観の狭さに原因があることも考えられます。



支援のヒント

勝敗への極端なこだわりがある子

ゲームを始める前に、その子に「ゲームでは負ける事もある」ことを話し、負けた時にはどのように行動すればいいか教え、「負けても我慢することを約束します。

その子が少しでも達成感、肯定感が感じることができるようゲームのルールを簡略化します。

その子の悔しい気持ちをことばで表し、悔しさを教師が受け止めていることを伝えます。



特に勝敗へのこだわりが強い子には、本人が受け入れられる程度のちょっとした負けを経験させます。また、ジャンケンや簡単なゲームにより「一度負けても次は勝てる」という気持ちを育てます。

一番でないでと騒ぐ子

並ぶ順番は、いつも早い順ではなく、背の順や番号順など状況に応じて柔軟に変更し、いろいろな並び方があることを経験させます。

特定のものや事柄に強くこだわる子

こんなことが考えられます

特定の物が好きで、時や場所を選ばず熱中したり、話しかけたりする子や、逆に苦手と思うことを極端に嫌って避けようとしたりする子がいます。



こだわりの強い子には、興味・関心の幅が極端に狭く、変化に対して順応できない場合があります。そのため日常生活に不安が多く、安心できる物や場面などに執着する傾向が見られます。



支援のヒント

こだわりをすぐに解消することは難しいようです。そこで、できることを増やし、興味・関心の幅を広げることでこだわりを和らげます。多くの経験をとおして、人や状況に合わせる力を身に付くよう働きかけます。

好きなことしかやらない子

「～をしてから～をしよう」と助言します。
こだわっていることに少しずつ変化をつけながら順応できるようにします。



初めてのことに不安になる子

ゲームのルールを簡単にしたり、当番のやり方を図や絵にして分かりやすく教えたりして見通しがもてるようにし、不安を解消します。

勝ちにこだわる子

「気にしない」、「次があるさ」などのことばを、試合を始める前に伝え、勝ちに対するこだわりを和らげます。

行動パターンを守り、変化を嫌う子

行動の見通しをつけられるよう、前もって変更などを伝えます。

几帳面にしないと気がすまない子

逆にこだわりを活用します。きちんとやり遂げられる係活動などを学級の手本にし、友達から一目置かれる存在にします。

感情のコントロールがきかずに大騒ぎになる子

こんなことが考えられます

いつもどおりのやり方でないと混乱して騒ぎ出す子がいます。また、その場の状況がつかめないときや自分の思いどおりにならないとき、友達に非難されたと思ったときなどに、感情のコントロールができず騒ぎ出す子もいます。また、過去のトラブルを突然思い出して、今起きたかのように感じ、騒ぎ出す子もいます。



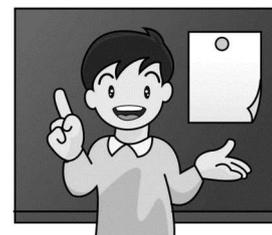
支援のヒント

強いこだわりが原因として予想される場合

どのようなときに大騒ぎするかを細かく記録し、傾向を把握します。何にこだわっているかを理解した上で、「できないこともある」ことを前もって伝え、かんしゃくを起こさないように約束します。

予定の変更に抵抗があると考えられる場合

予定の変更があるときは、事前に伝えておきます。混乱しないように、分かりやすい指示を出します。事前に、先の予定の見通しや予定変更があるかもしれないことを説明し、心理的な抵抗を和らげます。



【大騒ぎになり、集団活動ができなくなった時の対応】

保健室や特別教室など、静かに落ち着ける場所に移動します。
落ち着いてから話を聞きます。注意や叱責は避け、話を「傾聴・受容・共感」しながら、大騒ぎをした時の思いや願いを聞き取ります。
興奮が収まったら状況を説明し、どうしたらよかったか振り返ります。
振り返りながら、次に同じ状況になったときの対処方法を選択肢に示し、よりよい行動について教師とともに考えます。
担任一人での対応が難しい場合、校内で応援を頼むようにします。
例：携帯電話や手紙などを活用します。
普段から感情をことばにして表す練習をします。その子なりの我慢ができる工夫を考えます。例：深呼吸をする、水を飲むなど。

自分勝手な行動が多い子

こんなことが考えられます



状況をうまく理解できず、周囲に合わせられないのかもしれませんが、また、集団内への一斉指示が入りにくく、他の子どもと同じ行動がとれない場合もあります。わがままやしつけのせいと思われがちですが、注意集中の難しさ、記憶のとどめにくさ、感情のコントロールの難しさなども考えられます。



支援のヒント

指示の出し方を工夫します

声をかけるときは、まず子どもの名前を呼んで注意を向けます。

「今、となりの子は何をしていますか？」と周囲に注目を促します。

ルールややり方を分かりやすく提示します

手順や方法をできるだけ簡単に伝えます。また手順等を記した文字や絵図などを掲示します。黒板や教室の壁面に掲示するなどします。

例： のやり方、 など。

取り組み方を工夫し、取り組んだことを評価します

友達に迷惑をかけない程度のマイナスな行動は取り合わないようにします。

先生の手伝いなど役割を与え、皆の前で評価します。

今後の行動を予告し、予定どおりに少しでも取り組めた場合を見逃さずに認めます。

例：「よく待っているね。あと何番だよ。」

「どこまでやるか、どれならできるか、どういうふうにしたら取り組めるか」などを、教師とともに考える場を設けます。

気持ちや要求などをことばで伝える練習をします

最初は子どもの要求を受け入れます。徐々に制限を加えていきます。

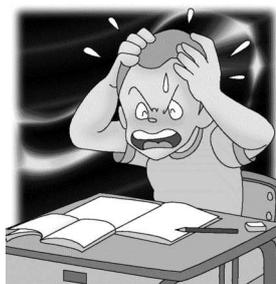
集団行動からはずれそうな場合は、事前にその子の思いや気持ちを把握し、その子の思いを周りに伝える機会をつくります。



テストを拒否する子

こんなことが考えられます

その子にとって設問の量が多いこと、周りの子や環境が気になり集中力が欠けてしまうこと、書くことに抵抗が強いことなどが原因でテストを受けようとしないう子があります。



支援のヒント

設問文の意味がつかめず困っている子

つまづいている設問文の読み取り方や答え方を個別指導します。

プリントを見ただけで、その量の多さにやる気を失う子

問題ごとにハサミで切り取り、できそうな問題を最初に取り組みようにします。できたら「できたこと」を認め、欲張らずに終了します。

次回は、残り時間から、何問できそうかを申告させます。

赤ペンで、「どこをやるか」、「どこまでやるか」を指定することで、取り組みやすくなる場合があります。

気に入らない得点や間違うことに強い抵抗感をもっている子

100点にこだわる子には、事前に「100点でなくても大丈夫」など話しておきます。

テストに出すプリントと同様の形式のものを、事前に保護者に渡して取り組みます。テストのやり方が分かれば、安心して学級の中でもテストが受けられます。

友達や周囲のことが気になって、集中できない子

周囲の子から席を離したり、壁に向かって机を設置したりすることで、集中できる場合があります。

書くことが困難なため、テストが受けられない子

書字障害がある子どもの場合は、原因が「書く」ことにあります。書くことにこだわらず口頭で回答を求め、教師が代筆します。

担任の先生へ

こうした特別の配慮をするときは、あらかじめ学級の子どもたちに説明しておくことが必要です。お互いの理解も深まります。



挙手をしたとき、指名されないと我慢できない子

こんなことが考えられます

答えが分かると、どうしても自分が答えたくなったり、他の子が指名されると自分が無視されたように感じたりして、大騒ぎになってしまうことがあります。



支援のヒント

友達や先生から注目されたい気持ちが強いのでルールが守れない子

まず参加意欲を認めてあげます。「よく考えているね」、「自信があるんだね」、「他の子の発表を聞いて、答えが合っているか教えてね」などと、その子の意欲を受け止めながら、周りの子どもに伝えます。

集団で学習している状況が分からなくなって、気持ちだけが先に行ってしまう子

発表する際には、事前に発言カードを渡しておき、決められた回数を上手に使うよう声かけします。
上手に発言できた時は、そのことを認めます。



他の子のまねをする子、手を挙げることで自分が目的になっている子

指名しても答えが出てこない時は、子どもの側に行き、小さな声で答えを聞いてから、発表を促します。

話の部分的なことに反応して挙手したり、気に入ったことがあると、大はしゃぎする子

友達や先生の話の一部でも聞いたり、見たりしていたことを取り上げ認めます。また、はしゃいでしまった時は、「楽しそうだね。でも今は、笑わない顔で話してね」と声かけします。

担任の先生へ

保護者には、学校のこうした取り組みにより子どもが成長してきていることを、継続的に連絡帳等で伝えていきます。

ぼんやりしていて、やる気が感じられない子

こんなことが考えられます

ぼんやりしていて学習への参加意欲を示さない場合は、やる気が感じられない姿に見ることがあります。また集中力が短いことにより、飽きっぽく見えることもあります。



支援のヒント

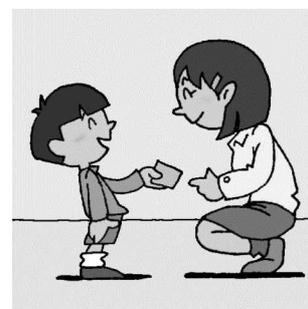
自分の世界に入ってしまう子や他のことに気が取られている子

「黒板の字をノートのここに写しましょう」など、具体的に指示します。肩をとんとんとたたいたり、時には「わっ！」と声をかけたりたりするのも一つの方法です。「びっくりした」などと反応があったら、すぐ「ごめん」と謝って、学習への参加を促します。

「分からない」ことがうまく伝えられないため、結果として「ぼんやり」した姿になってしまう子

説明には、絵や図を使って視覚的な援助を加えます。説明にその子の名前を使ったり、ちょっとした作業の手伝いを依頼したりして促します。

例：教師と一緒に提示する教材を持つ。



一つのことですぐ飽きて、拒否してしまう子

小さな達成感を多く味わえるよう工夫します。例えば、時間のかかる活動や作業は、いくつかの部分に分けます。作業の終わりが予想できる課題にすることで、短時間で取り組み、仕上げることができます。

家庭や友達関係で悩み、学校生活に気持ちが入らなくなっている子

授業中だけでなく、休み時間や給食時の様子なども観察します。必要に応じて、家庭や教育相談担当や養護教諭などと連携して、相談体制を整えます。

教室から勝手に出て行ってしまう子

こんなことが考えられます



学習の基本的な行動様式が身に付いていなかったり、友達と一緒に活動したいという思いが少なかったりします。

感情のコントロールが難しいため、気分のおもむくままに教室から出て行ってしまう場合もあります。また、周囲の刺激にも過敏に反応してしまうこともあります。



支援のヒント

担任一人で対応するのではなく、学校全体で対応します

教室から出て行ってしまったときの体制を整えておきます。

例：インターフォンや携帯電話で連絡をとります。保健室や校長室で受け入れます。

教室を出るとき、戻るときの約束や伝え方を具体的に教えます。

興奮しているときは、落ち着ける場所を用意しておき、そこで過ごすようにします。

学習に集中し、持続できるような配慮をします

子どもが少し努力すればできそうなルールを掲示し、ときどきそれを読むように促すなどして、再確認していきます。

子どもが学習に参加しているときを逃さずに、ことばして、認め、ほめるようにします。

例：「すごい発見をしたね」、「それはおもしろそう」、「計算をがんばっているね」、「が上手に書けたね」など。

どのようにすればよいかを説明したり、学習の見通しがもてるように活動量を調整したりします。



「自分が学級の一員なんだ」という自覚がもてるよう配慮します

学習に参加しているときに、「みんなと同じだね」など、ことばに出して伝えたり、他の子どもにも本人のがんばりを紹介したりします。

本人がかかわっているグループの活動に教師が加わり、その子の成長を他の子どもに伝えます。お互いのよさを共有する雰囲気になるよう配慮します。

座っていられずに、立ち歩く子



こんなことが考えられます

興味のあるものに注意が移りやすかったり、周囲からの刺激に過剰に反応して注意が集中できなかつたりすることが考えられます。また活動の内容がわからなかつたり見通しがもてなかつたりしている場合も考えられます。



支援のヒント

教室環境を整え、不要な刺激を取り除くよう努めます

窓側の座席は、外の景色や外から聞こえる声や音など刺激が多く、集中を妨げます。また陽の光や風、カーテンの動きも不要な刺激になります。最前列や廊下側の壁際など刺激の少ない座席にします。

学習に関心を示さない時は、保護者の理解を得た上で、当面は机上で行う個別の活動を用意します。

指示の意味を理解できないことがあります 聞いたほうがよくわかる場合と見たほうがよくわかる場合があります

その子の状態に応じて指示の出し方を工夫します

呼名して視線を向けるよう指示します。

指示は「短く・ゆっくり・はっきり」伝えます。

指示の聞き取りができているかどうかを復唱により確認します。

指示を板書したり、指示カードを示すことも併用します。



指示や課題をスモールステップにして与え、できた、やれたという自信が味わえる経験を増やししながら、少しずつステップアップします

活動の見通しがもてるように、「あと半分」「もう少し」などの声をかけます。

小さな目標を立て、一つでも課題が達成できたらほめます。

小さな成長を認め、行動の改善を促します

席に座って学習できた時間を計り、「今日は 分で成功」と伝え、叱ることよりほめることで行動の改善を促していきます。

苦手なことに取り組めない子

こんなことが考えられます

手先が不器用だったり、漢字がなかなか覚えられなかったりすることで、学習への意欲が育っていない子がいます。努力しても思うような結果が出ないために失敗体験が重なっているのかもしれませんが。また、集中するのが苦手だったり、面倒なことや根気のいることに取り組もうとする意欲や気持ちが十分育ってなかったりする場合があります。



支援のヒント

好きなことや得意なことを認めます

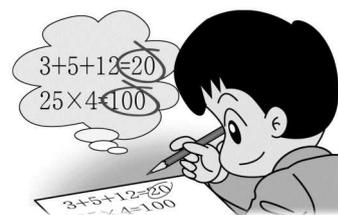
その子の好きなことや得意なことが発揮できる場面を設定し、その活動を認めます。自信をつけることで、苦手なことに向き合おうとする気持ちが生まれる場合があります。

つまずきの原因を探し、指導法を工夫します

算数の筆算が苦手な場合は、位をそろえることができなくて計算ミスを繰り返しているのかもしれませんが。どこでつまずいているのか観察して、それに即した支援を行います。

小さな成功体験をたくさん重ねていきます

少し頑張ったらできる程度の学習目標を立て、できたらその都度、評価して励まします。漢字だと「3文字書こう」、計算だと「5問だけしよう」と具体的な見通しを与えます。



家庭の協力をお願いします

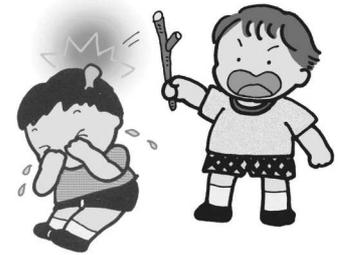
学校でやっている支援や指導の工夫を、家庭にもお願いします。家庭で予習したことをすぐに学校で生かすようにします。家庭の期待が大きすぎる場合もあります。家庭の思いを受け止めながら、子どもの実態について話し合います。

すぐに暴言をはいたり暴力をふるったりする子

こんなことが考えられます

ことばで表現することが苦手なために思いを人にうまく伝えられず、いらいらしてしまう子がいます。

また、感情をコントロールすることが苦手なため、かっとなりやすいこともあります。状況が理解できずに、自分だけが攻撃されているように感じてしまう子もいます。



支援のヒント

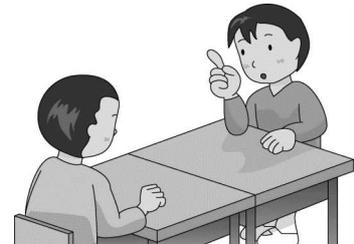
興奮を静める工夫をします

興奮している場合は、時には他の教師の助けを得て、一対一で静かに話せる部屋に移ります。感情的な叱責は、怒っていることが伝わるだけで、ますます興奮します。刺激の少ない部屋で落ち着くのを待って話し合います。

状況を理解できる工夫をします

本人が周囲の状況を理解できずにイライラしていたら、側に行って話を聞き取り、不安や不満を受け止めます。

時には絵や図などを利用して、状況の説明をして、理解を深めます。



自分の気持ちをことばで相手に伝える体験を重ねます

「ことばで言えば相手に気持ちが伝わる」ということに気付くと、攻撃的な言動が減っていくことがあります。ことばで表現するのが苦手な子どもには、時には教師が気持ちを代弁します。

家庭や地域、友人関係等の言語環境を把握し環境改善に取り組みます
関係機関と連携して学校として働きかけられる範囲で環境改善に努めます。

ことばの指示が入らない子

こんなことが考えられます



一対一で話すとよく聞くことができるのに一斉指示が入りにくい子、書かれたことは読んで理解できるのに聞いて理解することが苦手な子、聞いたことを覚えることが苦手な記憶にとどまりにくい子などがいます。また、注意力に問題があるため、周りの子どもの話し声や教室内や校庭の物音が気になって、先生の話に注意を集中できない子もいます。



支援のヒント

何をすべきかにポイントを絞って指示や説明をします

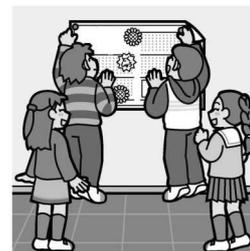
伝えたいポイントを絞り、簡潔に、具体的に話します。

板書や表示を利用し、文字や絵図で表します

聞くことよりも文字や絵図などを目で見る方が得意な子どもがいます。そのような子どもには、指示などを板書したり紙に表示したりすることで、情報がスムーズに入りやすくなります。指示を忘れてしまっても黒板に残しておくことで、何度も確認ができ不安が解消します。話の一部分に気をとられ、肝心なところを聞き逃してしまう子どもがいます。大切なポイントを繰り返して話したり、文章のポイントにマークをつけたりします。

聞き取りやすい環境を作ります

座席は、教室の一番前など、板書が見えやすい位置にして、刺激を少なくします。



注意を向けてから話しかけます

話しかける前に名前を呼んだり、視線をこちらに向けさせたりします。側に行って小声で話しかけるのも効果的です。

手本となるモデルを示します

指示を理解してないような態度が見られたら、先生や周りの子どもが実際に正しい行動を示すと分かる場合もあります。

一方的にしゃべる子

こんなことが考えられます



場の雰囲気や状況を把握したり、相手の気持ちを理解することが苦手なために、一方的に自分の言いたいことを話す子や思いついたことを口に出さずにいられない子がいます。また、自分の言いたいことをまとめて伝えられず一方的に話すため、何を言いたいのか聞き取れない子もいます。



支援のヒント

話す時と聞く時の区別をつけます

発言や話の聞き方のルールを掲示しておき、随時、確認をします。

話したり聴いたりする時のルールをサインにします。

例：「おしゃべり信号機」... 青は自由におしゃべり、黄色は手を挙げて発言、赤はおしゃべりをしない、というように視覚的に分かりやすいサインを出します。

小人数のコミュニケーションゲームをします。

話し合いの見通しを示し、最後まで話を聞くことができたなら評価します
話の終了時刻を知らせたり、いくつ話をするのかを予告したりします。
最後まで黙って聞けたらすぐに評価します。

私語が多いようなら話を止めて注意を促します

「今、誰が話すときか」を確認します。

話を聞いている友達を評価し、自己評価を促します。



話したい気持ちを受け止めます

休み時間など余裕があるときに、静かな落ち着いた場所で、子どもの話にあいづちを打ちながら、じっくり聞く機会をもちます。

授業中は「授業が終わったら、話を聞く」ことを約束します。話したいことをメモ書きして残しておくことを伝えます。

話し方が身に付くよう支援を工夫します

話したいことを短文で話す学習を設定します。

タイマーや砂時計により、自分の話す時間を意識させます。

相手に伝わらないときは、教師が聞き取りをして、補足したり、代弁したりします。できるだけ本人にも復唱させます。

整理整とんができない子

こんなことが考えられます

手先の不器用さがあり片づけを負担に思っている子、他のことに注意がそれてしまい片づけを忘れてしまう子など、身の回りの整理整とんがなかなか進まない子どもたちがいます。

また、見通しを持って計画的に行動することが苦手な子や片づけの手順そのものが分からない子もいます。



支援のヒント

片づける場所やしまい方を具体的に指示します

何をどこに収めれば使いやすいかを決めておきます。

片づける場所に、片づける物の写真や絵等を貼り付けます。ビニールテープ、ラベルなどに片づける物の名称などを書いて貼ります。

物を分別する専用の箱を用意します。配布物や教科ごとにまとめる袋を用意します。袋は、ラベルを貼った透明なものにすると、すぐに分かり、出し入れがしやすくなります。

学級指導の中で、持ち物の整理する日を設けます

一週間に一回程度、整理する時間を作ります。

休み時間前や下校時などの時間を利用します。

例：「これが終わったら休み時間。」と伝えます。

片づけ方の手順を一つずつ具体的に練習します

片づけ方や順番を、具体的に示します。

例：捨てる物 家に持ち帰る物 決まった所にしまう物

一つ一つの片づけ方の見本を示します。

「あと～で合格」「これ誰の」と声かけし片づけの意欲を高めます。

上手に整理整とんができた時には、感想を聞き取り意欲を高めます。

必要な物だけ机の上に出します

必要な学習道具を板書して示します。

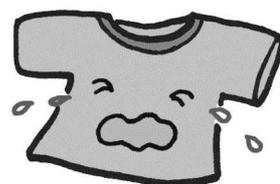
片づけから準備までの時間を確保し、定着を図ります。

例：秒で出し入れなどのゲーム化をします。

自分の持ち物が分かるように目印をつけておきます



行動への取りかかりが遅い子



こんなことが考えられます

衣服の着脱をはじめ、行動への取りかかりが遅い子の中には、家庭環境や養育上の問題が原因になっている場合が考えられます。また、周囲のことに気が散りやすいことや手指の巧緻性に課題があったりすることも原因として考えられます。他の事柄にこだわってしまい、時間がかかってしまう場合もあります。



支援のヒント

つまずきの原因を探り、具体的な援助を工夫します

例：衣服の着脱に時間がかかる子には...

着脱しやすい服に変更します。

洋服の後ろ前や左右に、マークをつけます。

家庭でも学校と同じ取り組みができるようにします。



自分から行動できるよう、具体的な援助を工夫します

教示 モデリング リハーサル フィードバックのステップを踏んだ学習過程を繰り返します。

例：手順を指導する 模倣を促す 一緒に取り組む 一人で繰り返し練習する

一人で行動する 評価をして再度、練習する

見通しをもって取り組めるよう、手順やスケジュールを作り、掲示します。

その子が少しでも取り組んでできる仕事や方法を工夫します。できたときの成功感が多く味わえるよう工夫します。



時間内に行動できる具体的な援助を工夫をします

終了時刻や取り組む時間を決めておきます。

例：視覚的に時間が意識できる砂時計やタイマーを利用します。

家庭の協力をお願いします

家庭と連絡を取り合って、できるだけ同じ手だてで行うことが大切です。学校での具体的な取り組みを話し、協力を求めます。

(2)気がかりな子どもの保護者と理解し合うために



保護者との面談に当たって

子どもの問題行動が障害に起因するものかどうかは、医師等の専門家による診断によります。ですから、けっして教師の見立てにより障害の有無や障害名を診断することは避けなければなりません。保護者の中には、



わが子の障害について正しく認識している方とそうでない方がいますので、障害に係わる言葉は慎重に扱い、子どもの人権が損なわれないようにします。

まず、保護者との信頼関係づくりを心がけます。子どもの学校での様子を保護者に伝えるときには、よい面や成長している面を中心に、課題となる面を交えながら具体的事実に沿って話すようにします。「身の回りの整理ができなくて困ります。家庭でもしっかり指導してください」など、始めから子どもの悪い面や教師の要求を伝えるだけでは、保護者は教師のことばに耳を傾けようとしないうばかりか、子どもの実態を見ようとしなくなります。

次に、保護者と話し合うときは、保護者の心情を受け止めながら学校生活の様子を事実として伝えながらも、担任と保護者が一緒になって改善していこうとする気持ちが伝わるように話し合うことが大切です。保護者との面談の中で、早急に医師等の受診を勧めることは避けましょう。保護者の方から専門機関を紹介してほしいという要望が出るケースはまれですが、専門家を招いた授業観察による見立てを受けて話を進めていくことも考えられます。面接の際、必要に応じて管理職に同席してもらおうとよいでしょう。

保護者との連携に際して



保護者との連携は、保護者が「この先生はわが子を受け入れてくれている」と感じたところから始まります。しかし、学校での様子を保護者に伝えようとして問題行動を羅列したり、養育上の責任を問うようなことばを言ったりすることは、児童を否定していると受け取られます。

そこで、保護者と話し合うときは、まず保護者の話にしっかりと耳を傾け、保護者の考えや悩みを受け止めることが大切です。「受け止める」ということは、保護者の話や要求を「認める」こととは限りません。

例えば、保護者が「個別にもっとかかわってほしい」と要求してきたときは、「この保護者は個別のかかわりを増やしてほしいと考えている」と素直に受け止めることです。「お母さん、これ以上は無理です」と言う前に、「お母さんはもっとかかわってほしいと考えているんですね」と返します。その上で、教師の考えを伝えるようにします。また、このような話し合いは、誤解を生じさせないためにも、電話ではなく、できる限り事前に時間を決めて直接話し合うようにしたいものです。

学校での児童の様子は、主観を交えず「ができない」ではなく、「ならできる」という理解とともに「～などの対応をしてみたらできましたよ」などと工夫したことと児童の変容を保護者に伝え、「今後、どう対処したらさらに改善されるか一緒に考えましょう」という姿勢で話し合うことが大切です。



(3)学級の保護者への理解を深めるために



学級で障害のある子どもが大騒ぎをしている様子などを我が子から聞いた保護者の中には、学級に対して不安や誤解を抱くことがあります。

全体に話すとき

就学前や前年度までの保護者同士の人間関係や、周囲の保護者が障害についてのどの程度理解しているかを把握しておく必要があります。その上で、周囲の保護者にどの程度、理解や啓発を進めるかを校内で共通理解しておくことが大切です。

年度当初の保護者会では、学級経営の基本方針として、

一人一人みな違う個性をもっていること

どの子ども他の人と違うよさをもっていること

という担任の考えを伝えるようにします。



また、障害のある子どもの特性を説明する場合には、人権を侵害することのないよう十分配慮し、どんな説明をするかを当事者の保護者と事前に話し合い、了

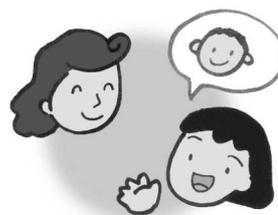
解を得ておくことも大切です。



年度途中には、保護者会や学級だよりなどで、一人一人の子どもによさや障害のある子どもと共に活動する様子を知ら

せるようにしたいものです。また、専門の相談機関と連携を取り、すべての保護者を対象にした「子育ての学習会」を開催したりすることも考えられます。

個別に話すとき



保護者が教師に不信感を抱いている場合、学校に相談せずに、直接保護者同士で話し合うことがあります。そのために、かえって問題が複雑化することがあります。そのようなことにならないよう、保護者が学校に相談しやすいようにする工夫が必要です。そこで、教師は保護者に対して「気軽に相談してください」、「事前に連絡をくだされば、時間をとります」と保護者会などで伝えておくようにします。

面談の申し込みがあったときには、保護者の気持ちを理解するよう心がける必要があります。保護者の状況や相談内容が深刻であったり、学校全体にかかわる話であったりした場合は、管理職に同席してもらうようにします。

実際の相談に際しては、「保護者の話を傾聴すること」を基本にして、学校の立場をはじめから表明して対応することのないようにします。

また、連絡帳に疑問や意見を書いてくる保護者もいます。その返事は連絡帳で済むことか、時間をとって直接話し合う必要があることかを、保護者の置かれている立場と記載内容から判断することが大切です。その判断が難しい場合は、管理職に報告し、今後の対応を確認します。



(4) 相談機関を勧めるために



まずは保護者との信頼関係を

保護者との信頼関係をつくるには、保護者が「この教師はわが子にとって役立つ存在である」との実感が持てるよう努めることが大切です。

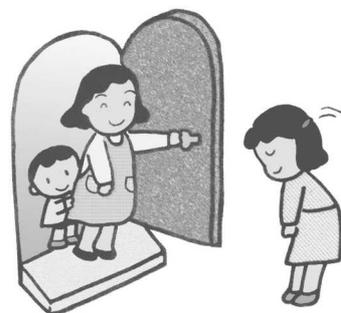
そのためには、

笑顔で明るく対応する

保護者の話に耳を傾け、一緒に考える姿勢を持つ

子どものよいところを認め、伝える

子どもの小さな変容を見逃さず、保護者と“共に喜ぶ”



ことが必要です。

通常の学級で指導を受けることが望ましい知的に遅れのない発達障害(AD/HDやLD等)の子どもの保護者には、さらに次の二点を心がける必要があります。

今までの苦勞を理解する。(過去の努力を否定しない)

なぜなら、学校に入学させるまでには多くの困難があったことが推測されます。今までの養育のあり方で不適切なことがあったにしても、そうせざるを得なかった事情も理解できるからです。また、

定期的に連絡をとる

ことも大切です。



手段としては、電話をかける、連絡帳に書く、家に立ち寄るなどが考えられます。そして、そのときは、「努力していることをしっかり伝える」ようにします。

相談機関をどう勧めるか

保護者に専門機関を勧める際には、信頼関係ができていることがまず必要です。しかし、信頼関係ができているでも「AD/HDの疑いがあります」、「LDの疑いがあります」等、障害名を口にするのは誤解の元になるので避けた方がよいでしょう。担任がどのような思いを持っていても、まずは、「一緒に話し合い、悩みを共有し、一緒に考える。」という姿勢をもちましょう。

担任が受容的な姿勢で、ありのままの子どもの姿を伝えていくことにより、保護者が子どもの姿を次第に認めるようになります。そのときは、

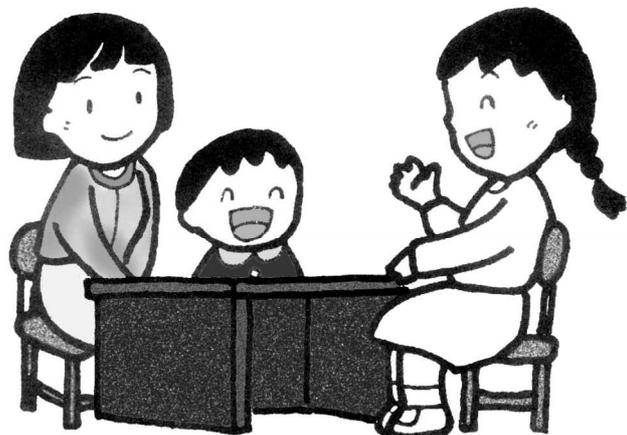
「このままで大丈夫でしょうか」「どうすればいいでしょうか」

などのことばになることが多いようです。このような保護者の気持ちをしっかりと受け止めたうえで、

「お子さんのよりよい成長のために、専門機関の助言を得てみませんか」

と勧めてみましょう。

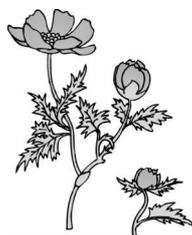
また、学校から話を切り出すのではなく、相談機関の専門家を招いて、保護者と一緒に話を聞き、専門家から助言をもらうことも効果的です。



「気がかりな子どもの理解と支援マニュアル」

練馬区学習障害児等教育推進委員会

- 委員長 橋 本 徹 (開進第四小)
委員 濱中美由紀 (北大泉幼稚園)
山形美恵子 (旭丘小)
井上 早苗 (豊玉第二小)
丸山 晃 (開進第四小)
齊藤 代一 (南町小)
檜 公子 (北町西小)
喜早 菜穂子 (光が丘第一小)
高橋 史郎 (光が丘第三小)
久保 努 (関町小)
長野 俊子 (大泉小)
岩澤 ゆみ子 (大泉南小)



発行 平成17年3月

問い合わせ先

練馬区教育委員会学校教育部指導室

03 - 3993 - 1111 (代表)